中央大学社会科学研究所年報　第 26 号（2021）

中年独身者の生活実態と将来不安

――50 代独身者への質問紙調査から――

山　田　昌　弘*

The Life Situation of Middle-aged Singles and Their Anxiety in Future

YAMADA Masahiro

Nowadays, the number of middle-aged singles（people who have no spauses）has been increasing in Japan. According to the census of 2020, the number of single people of 50's was over 5 million. The main reasons are the increases of unmarried rate and divorce rate.

I conducted an internet survey and intervew surveys of the middle age single people to reserch about their life situations and anxiety in future.

Acording to the survey, many middle age singles feel solitude, and most of them will face risks of pevety and isolation. Over half of Unmarried men living alone have noone talking with. The annual income of about half of women living with their parents is under 2 milion yen, so they depends on their parents's income.And 75% of middle age singles feel they will die without anybody present.

キーワード：50 代，独身者，離別者，親同居中年，老後不安，介護不安，孤独死，中高年婚活

【目次】

1．中年独身者の増大
2．社会問題化する中年独身者
3．50 代独身者の多様性
4．50 代独身者の生活実態　調査の概要
5．50 代独身者の家族類型
6．50 代独身者の生活状況
7．50 代独身者の親密関係
8．将 来 不 安
9．ま　と　め

＊中央大学文学部教授

1．中年独身者の増大

現在日本では，中年で配偶者がいない人，つまり，中年独身者が増えている．

「中年」の正確な定義はないが，若年でも高齢の間にある人々，概ね，40 代から 64 歳までを指すことが多い．壮年という言葉になると，辞書的には，働き盛りという意味が入り，30 代後半から 50 歳頃までを指すとされる（『明鏡国語辞典』）．実年という言葉もあり，1985 年厚生省（当時）が 50 代，60 代を指す言葉として作ったものである．また，熟年という言葉もあるが，こちらは，1970 年代に 40 代，50 代を指す言葉として作られたという経緯はあるが，現実には，高齢者も含めて中高年と同じ意味で使われている（『明鏡国語辞典』）．

社会的に言えば，若年者が就職し，結婚，生殖を期待される年齢，中年は子どもを育てながら生産活動を行うことを期待される年齢，そして，高齢者が仕事や子育てなど生産，再生産活動から引退する年齢というニュアンスがある．

「配偶者の有無」という観点から見た場合，若者はこれから結婚する未婚者が多く，高齢では配偶者との死別が見込まれる時期であるならば，中年は，いわば「配偶者」が存在することが当然と見なされる年代と言えよう．

50 代独身者増加の程度を，1990 年と 2020 年の国勢調査のデータから見てみよう（表-1）．

1990 年には，50 代（ほぼ 1931-40 年生まれに相当）男性の約 90%，女性の約 82%に配偶者がいた．女性は男性より低いがそれは，死別が多いからである．未婚率は，男女とも 5%未

表-1　国勢調査による配偶関係　1990 年，2020 年

	男　性			女　性		
	有配偶率	未婚率	離死別率	有配偶率	未婚率	離死別率
50-54 歳	90.4%	4.3%	4.8%	84.2%	4.1%	11.3%
55-59 歳	91.3%	2.9%	5.3%	80.0%	4.2%	15.4%
	有配偶者	未婚者	離死別者	有配偶者	未婚者	離死別者
50-54 歳	361 万	17 万	19 万	345 万	17 万	20 万
55-59 歳	345 万	11 万	20 万	315 万	16 万	61 万

注：1990 年配偶関係（不詳は含まないので合計は 100%にならない）．

	男　性			女　性		
	有配偶率	未婚率	離死別率	有配偶率	未婚率	離死別率
50-54 歳	65.5%	26.6%	7.9%	70.2%	16.5%	13.4%
55-59 歳	69.2%	21.6%	9.2%	72.3%	12.2%	15.5%
	有配偶者	未婚者	離死別者	有配偶者	未婚者	離死別者
50-54 歳	288 万	117 万	35 万	305 万	71 万	58 万
55-59 歳	273 万	86 万	37 万	287 万	49 万	61 万

注：2020 年配偶関係（不詳は案分処理されている）．

満で，独身者は，男性約 55 万人，女性約 114 万人と女性の方が倍以上多かった．男性未婚者は，28 万人にすぎなかった．

2020 年には，50 代（ほぼ 1961−70 年生まれに相当）独身者は，男性 276 万人，女性 239 万人と大幅に増加した．特に男性の増加が著しく，人数的に男性は約 5 倍，女性でも約 2 倍に増え，男性独身者が女性独身者を上回るようになる．男性では，3 分の 1，女性は約 3 割に配偶者がいない状態にある．

詳しく見ていくと，男女とも，独身者の中で，死別の独身者が大きく減ったことが分かる．長寿化の影響で，男性平均寿命の伸びによって，50 代で，夫との死別によって独身になる女性は減りつつある．

一方，未婚者と離死別者は大きく増えている．特に男性未婚者が著しく増大し，50 代前半の男性未婚者は 204 万人と 30 年で約 7 倍になったことが分かる．そして，離死別者も男性が増えているが，女性の離死別者の増加数の方が多い．ただ，未婚化の傾向は男女ともに広がり，女性においても 50 代前半では，未婚者の方が離死別者より多くなっている．

中高年未婚者に男性が多く，離死別に女性が多い理由の 1 つは，男女の再婚率の違いにある．つまり，離死別男性は，女性に比べ再婚しやすい．何度も結婚する男性は，何度も結婚する女性より多い．そのため，初婚女性と再婚男性の組み合わせが多くなり，男性の未婚率が高まる．また，平均寿命が女性の方が約 6 歳長く，夫婦の年齢差が男性の方が平均 2−3 歳年長であるため，死別女性が多くなる．

ここでは，50 代の数字を示したが，40 代でも独身者，特に未婚者が更に増大しており，彼らが 2030 年に 50 代になったときには，2020 年の 50 代よりも独身者数が増えていることは間違いない．

2．社会問題化する中年独身者

現在，中年独身者が様々な形で社会問題化されている．背景には，前節でみたように，配偶者の存在が期待される年齢にもかかわらず，配偶者がいない人が無視できないほどに増大していることがある．

もちろん，独身であることが，即「問題」になるということではない．特に，自ら独身を選び取っている「独身主義者」が問題とされることは少ない．逆に，今まで社会問題にならなかったのは，中年独身者は，自ら選んでそうなっていると見なされてきたからである．

しかし，現在増えている中年独身者は，結婚したくてもできなかった未婚者と離別者が多くを占めている．1997 年の第 12 回出生動向基本調査から結婚意欲のデータを見てみよう．18−34 歳の未婚者（2022 年時点で 43−59 歳）の結婚希望者は，男 85.9％，女性 89.1％であり，その年代の半数は既婚なので，男性であっても 90％，女性であれば 95％以上の人が既婚，もし

くは結婚希望者だったことになる．結婚を希望しない未婚の若者は，男性でも未婚者の6.3%，女性では4.9%（不詳があるので，100%にならない）にすぎなかった．既婚や離死別者を加えた世代全体から見れば，男女とも4%に満たなかったのである．現在の中年未婚者の大多数は，若い頃は結婚を希望していたことになる．

離別に関しても，通常，結婚した時点で将来の離婚を予測するものは少ないので，離別独身者の大多数は，予定外の独身と言ってよい．死別でも，該当者の配偶者は同年代であった人が大部分である．つまり，50代までに亡くなったと推定される．平均寿命が男女とも80歳以上であることを考えると，ほとんどが予期せぬ形で独身者になったと推測される．

つまり，50代で配偶者がいない人の大部分は，未婚，離別，死別にかかわらず，いわば「不本意」な独身者と言うことができよう．この不本意な独身者が増えていることが，様々な問題を生み出す背景となっている．

独身者の社会問題化の方向は2つあり，1つは，「70-40問題」「80-50問題」また「中年ひきこもり」と言われるように，親と同居する中年独身者に焦点を当てたものである．もう1つは，孤立や貧困という視点から「一人暮らし」もしくは「ひとり親」の独身者に焦点を当てるものである．

「70-40（ナナマルヨンマル）問題」とは，70代の親と40代の独身の子が同居している状況を表した言葉である．「80-50（ハチマルゴーマル）問題」は80代の親と50代の子が同居している状況である．親子の年齢差が平均約30歳なので，このような言い方が一般化した．特に，2019年内閣府によって，40-69歳の中高年ひきこもりの人数が61万3千人と推計する調査が公表され，話題になった．ただ，中高年ひきこもりと中高年親同居独身者はイコールではない．親同居独身者全てが，今問題を抱えているというわけではなく，むしろ親が亡くなった後の経済的困窮，心理的孤立が今後の社会問題として浮上することが重要と判断している（山田2017）．

もう1つは，主に単身者に焦点を当て，その脆弱な経済基盤と社会的孤立を問題視するものである．これは，戦前には，「単身者」が問題とされたり，近年は「ひとり親女性」の貧困状態が問題にされた．ただ，戦前は都会に出てきた一人暮らしの若者，ひとり親の問題化に関しては，主に未成年の子どもを育てている母親に関しての問題化であって，多くの子どもが成人に達している50代が注目される事は少なかった．

中年の孤立を実証的に研究している石田光規によれば，孤立感を感じるのは，一人暮らしよりも親同居の方が多いという調査もあるので，必ずしも一人暮らしが孤立に結びつくわけではない（石田2011）．また，自立できるだけの収入があるから，親と同居せずに暮らしているという側面もあるので，必ずしも一人暮らしが貧困というわけではない．この点も注意しながら分析を進める必要がある．

上野千鶴子が『おひとりさまの老後』で述べたように，一人暮らし自体が問題と言うよりも，一人暮らしでも「戦略的」に努力する必要が生じる社会となったと言う事ができよう．戦略的に努力しなければ，老後，貧困や孤立に陥ってしまう状況が生じているということになる．そして，社会的孤立に陥りやすいのは，男性であるので，男性問題として主題化されている（例えば，能勢・小倉 2020）．分析にはジェンダー差に注目して分析していくことが必要である．

3．50 代独身者の多様性

2022 年の 50 代の約 7 割を占める有配偶夫婦に関しては，その生活実態は想像しやすい．その中には，子どもがない夫婦，再婚した夫婦や晩婚の夫婦も含まれているが，割合として少数派である．それゆえ，「典型的な生活」を想定することができる．

家族で言えば，平均 2 人の子育てがほぼ終了する年代で，夫婦で老後を見据える時期になっている．更に，この世代（1963−72 年生まれ）は就職氷河期前に学卒を迎えた世代のため，男性の多くは正規雇用者であり，雇用機会均等法成立以降就職した世代とはいえ，現実には女性の大多数は専業主婦かパートでの就労がほとんどである．つまり，夫が家計を支え，妻が主に家事を行う性別役割分業が多数派を占めている．それゆえ，家族社会学でも，共働きを含めて，このタイプの家族を対象にした調査研究が多い．

逆に，この年代の独身者（配偶者がいないもの）に関しては，典型的な生活を想定することは難しい．先ほどの国勢調査で見たように，未婚者が増えているが，離別者も増えている．離死別者には，子どもがいるケースが多い．

更に，私が 25 年前にパラサイトシングルと名付けた（1997 年日経新聞）ように，日本では成人後も親と同居する独身者が多い（山田 1999）．若年独身者といえども，一人暮らしが標準ではなく，親同居独身者が多いのである．中年独身者も例外ではない．実際，2015 年の国勢調査によると，40−59 歳の 650 万人の未婚者（独身者ではない）のうち，親と同居している者は，341 万人，一人暮らしをするものは 259 万人と，親同居者の方が多い（藤森 2022）．更に，離別者であっても，2005 年の私が行った調査によると，半分弱の女性は離別後親と再同居しているのである（山田 2006）．

増え続ける 50 代独身者の生活実態を把握するには，有配偶者以上に家族関係の多様性を前提にして，考察していかなければならない．

本論は，今まで標準的でなく，少数であった故に社会学的に考察されてこなかった 50 代独身者の家族生活の全体像をオリジナルな調査によって示し，社会問題化された中年独身者の問題状況の広がりを考察，そして，将来直面する課題を明らかにすることを目的としている．

4．50 代独身者の生活実態　調査の概要

本論では，50 代独身者の生活実態を把握するために，公にされているデータを用いるほか，オリジナルなデータセットを分析して示していく．

ここで，主に使用するオリジナルのデータは，次のデータセットによっている．

名称―『50 代独身者の生活に関する調査』2022 年 2 月 9-11 日実施，マクロミル社のインターネットモニター委託調査．サンプル数 1126 ケース．設問数 40．科学研究費基盤 B（科研費番号 20H01581，代表：山田昌弘）から調査資金を得ている．以下，「本調査」と略す．

調査は，50 代独身者対象で，先に引用した 2020 年の国勢調査に基づき，性別，5 歳刻み年齢，未婚，離死別に分けてサンプルの割り付けを行っている．2020 年 10 月の国勢調査から 1 年あまり経過しているが，他に参照するデータがないため，この割り付けで調査会社に依頼し，サンプルを収集した．割りつけは表-2 の通りである．

また，筆者は 40-50 代独身者に対するインタビュー調査も平行して行っており，適宜引用する．こちらは，中央大学特別研究費の助成を受けている．2022 年 3 月まで 13 ケース行っており，現在も調査継続中である．

更に，内閣府男女共同参画局『人生 100 年時代における結婚･仕事･収入に関する調査』データも適宜参照する．男女共同参画局調査課が行ったもので，私が主査を務めていたものである．2021 年 12 月-2022 年 1 月実施，インターネットコミュニケーションズ社委託，20-69 歳，20,000 サンプル．こちらも，2020 年の国勢調査の世代，婚姻状況の区分に従って，ケース属性を実際に近づけて収集している．

ただ，インターネットサンプルの調査は，必ずしも実態を正確に反映したものではないことに留意は必要である．そもそもパソコンやスマートフォンをもたないものは，サンプルから排除される．これらのものをもてない貧困層はそもそも回答できない．また，匿名回答なので，回答の信憑性が保証されないということも問題である．ただ，コロナ禍により対面の質問紙調

表-2　調査サンプルの割りつけとケース数

2020 年国勢調査	男　性		女　性	
	未　婚	離死別	未　婚	離死別
50-54 歳	117 万	35 万	71 万	58 万
全体％	22.8％	6.8％	13.8％	11.3％
サンプル数	260	75	154	125
55-59 歳	86 万	37 万	49 万	61 万
全体％	16.7％	7.2％	9.5％	11.9％
サンプル数	185	84	106	137

注：中年独身者（未婚，離死別）50-59 歳（調査回答時点），地域－全国．

査が困難になっている上に，郵送調査の回収率も低下している．サンプルの代表性に限界があるものの，他に代替手段がない以上，ネット調査の限界を承知した上で，ある程度の実態を把握するのに使用できると考える．

5．50代独身者の家族類型

前節で述べたように，独身者と言っても，人により，家族状況は異なる．

まず，独身理由は，男性は未婚73.7％，離別23.8％，死別2.5％．女性は未婚49.3％，離別43.7％，死別6.5％である．

学歴を見てみると，男性は，独身理由での差はほとんどないのに対し，女性は未婚＞離別＞死別の順に学歴が高くなっている（表-3）．これは，結婚時期の30年前には，いまだ，学歴が高い女性が結婚相手として避けられた効果かも知れない．

独身理由であるが，男女とも死別は離別の1割程度なので，今後，まとめて結婚経験者，離死別として分析する．その大部分は離別者となる．

次に，本調査での父親と母親の存命率は，父約40％，母約70％，両親とも亡くなっている人約23％である．世代差を30歳と見積もると，両親はほぼ80代となり，男性平均寿命約82歳，女性平均寿命約88歳（2020年）であることを考えるとほぼ妥当な数字だと考えられる．つまり，50代では，少なくともどちらかの親が存命である人が約4分の3と大多数であることが分かる．

次いで子どもに関しては，26.4％と，ほぼ4人に1人子どもがいる．ただ，結婚状況別に見ると，未婚1.2％であるのに対し，離別64.7％，死別66.7％と，ほぼ3分の2の離死別者には子どもがいることになる（1990年の婚外子比率は1.0％なので，未婚で子どもあり率1.2％は妥当な数字と言える）．

同居状況を見てみよう（表-4）．単身赴任のように，別居していても経済的に同一家計というのがあるが，概ね，同居している家族の範囲が生活や家計を同一にしているとみなすことができる．

表-3　独身理由別　学歴

（％）

		中高卒	専　門	短　大 高　専	大　学 （院含む）
男性	未婚	30.5	13.7	6.3	48.3
	離別	33.4	12.5	6.9	47.1
	死別	33.3	13.0	-	53.3
女性	未婚	35.4	14.2	28.5	21.5
	離別	47.7	13.2	19.7	18.8
	死別	65.7	5.9	20.6	8.8

表-4 独身理由別 同居者

（%）

	男 性		女 性	
	未 婚	離死別	未 婚	離死別
一人暮らし	49.0	62.3	45.4	39.3
父	22.7	12.6	20.4	8.4
母	44.0	23.3	40.4	16.0
きょうだい	10.8	3.1	13.1	4.2
子ども（未婚）	0.4	11.9	1.5	45.8
子ども（既婚）	0.2	-	-	1.9
その他親類	-	-	0.8	4.2
子どもの配偶者	-	-	-	1.1
その他親類	-	-	0.8	4.2
恋人	0.2	0.6	1.9	1.1
友人・知り合い	0.4	-	1.2	1.1
その他	0.2	-	1.2	1.5
シェアハウス，寮など	-	-	-	0.4
N	445	159	260	262

同居状況をもとに，次のように，50代独身者の家族類型を作成し，男女別に，以下の分析を進める．

「一人暮らし独身（シェアハウス，寮なども含む）」「親同居独身者（少なくともどちらかの親と同居する者）」「その他独身者（親以外の者と同居する者）」に分ける．その他独身には，子やきょうだい，恋人など多様な人と同居するものが含まれるがここでは，一括してデータを提示する（表-5）．全体では，一人暮らし未婚者47.9％と，ほぼ，半数が一人暮らしである．少なくともどちらかの親と同居するものは，36.6％，その他は15.5％という分布である．

ただ，一人暮らしでも，親と同居していて両親ともに亡くなったケースもあるので，一人暮らし者が,必ずしも親から独立して生活していたというわけではないことに注意は必要である．

男女，独身理由別に家族類型のケース数を示す．

このように，未婚者は，男女とも一人暮らしと親同居がほぼ同じ割合である．一方，離死別者をみると，男性は6割が一人暮らしであるのに対し，女性は，一人暮らしと親以外のものとの同居が約4割，親と同居者が約2割となっている．子どもがある場合，女性側が子どもを引

表-5 50代独身者の家族類型・ケース数

	男 性		女 性	
	未 婚	離死別	未 婚	離死別
一人暮らし	218	99	118	104
親同居	213	39	115	45
その他と同居	14	21	27	113

き取ることが多いことを反映している．

また，男性でその他と同居，女性で未婚でその他と同居は，ケース数が少ないので，数字の提示や解釈で除外することがあるので，予め理解いただきたい．

6．50代独身者の生活状況

まず，家族類型別，就業状況に関して見ていこう（表-6）．全体で見ると，①正規雇用者40.0%　②アルバイト・パート，派遣18.5%　③契約社員7.0%　④会社役員1.7%　⑤雇人がある自営業主0.8%，⑥雇人がない自営業主，フリーランス9.5%　⑦自営業の家族従業者0.8%　⑧内職0.2%　⑨無職19.0%　⑩学生0.1%　⑪その他2.5%となっている．①と④をまとめ，正規雇用（41.7%），②と③をまとめ，非正規雇用（25.5%），⑤⑥⑦⑧をまとめ，自営・自由業（11.3%）　⑨と⑩をまとめ無職（19.1%）となっている．

このように，就業状況に関しては，男女で大きな差がある．正規雇用と自営・自由業は男性に多く，非正規は女性に多い（その他同居男性はケース的に少ないので解釈から除外した）．自営業の跡継ぎが男性に多くいることの反映だと考えられる．ただ，無職は男女とも親同居の者が一人暮らしより多いことが窺える．

次に，収入状況を見てみよう（表-7-1・2）（わからない，答えたくないが19.6%を占めているので，注意する必要がある）．これも，世帯収入で見ても，年収200万円未満の者が2割を占めている．年収400万円未満が全体の半数近くを占めており，全体的に生活状況の苦しさが窺える．

個人年収になると，厳しい状況が見えてくる．34.1%とほぼ3分の1の50代独身者が年収200万円未満である．家族類型別に見ると，男女差が大きく，一人暮らし未婚女性を除き，年

表-6　家族類型別，就業状況

（%）

		正規雇用	非正規	自営・自由業	無　職	その他
男性	未婚独居	44.5	18.3	16.5	17.5	
	親同居	50.6	13.2	13.1	20.7	2.3
	他同居	21.4	35.7	21.4	14.3	7.1
	離死別独居	55.6	15.2	11.1	14.1	4.0
	親同居	41.1	12.9	20.5	17.9	7.7
	他同居	71.4	9.6	4.8	14.3	-
女性	未婚独居	35.0	33.0	8.4	16.9	1.7
	親同居	33.0	32.2	10.5	21.7	2.6
	他同居	22.2	48.1	7.4	18.5	3.7
	離死別独居	35.6	37.5	5.9	19.2	1.9
	親同居	26.7	46.6	6.6	20.0	-
	他同居	31.0	38.1	6.2	24.8	-

注：Nは，表-5を参照．

表-7-1 独身者の世帯年収，個人年収

（%）

	200万円未満	200-400万円	400-600万円	600万円以上	DK, NA
世帯年収	20.1	25.8	16.5	18.0	19.6
個人年収	34.1	25.9	13.4	12.3	14.2

表-7-2 家族類型別個人年収

（%）

		200万円未満	200-400万円	400-600万円	600万円以上	DK, NA
男性	未婚独居	28.4	21.6	17.4	20.7	11.9
	親同居	29.6	23.9	17.8	13.7	15.0
	他同居	35.7	21.4	14.3	7.1	21.4
	離死別独居	19.2	27.3	16.2	27.4	10.1
	親同居	35.9	15.4	23.1	12.8	12.8
	他同居	14.3	28.6	14.3	33.4	9.5
女性	未婚独居	27.1	33.9	9.3	9.3	20.3
	親同居	47.8	20.1	7.0	7.0	12.2
	他同居	48.1	14.9	14.8	7.4	14.8
	離死別独居	45.2	29.8	8.7	2.0	14.9
	親同居	48.9	22.2	6.7	-	22.2
	他同居	43.4	32.7	8.8	1.8	13.3

収200万円未満が4割以上占めている．女性は，ある程度収入がないと一人暮らしをしない世代だからと思われる．ただ，年収600万円以上では，女性の一人暮らしでも9.3%にすぎず，男性一人暮らしに及ばない．親同居未婚女性は，年収200万円未満がほぼ半数に達し，親の収入に依存して生活している様子が見てとれる．

男性でも，未婚者の年収は，離別者に比べ相対的に低く，親同居独身者の年収も低い．一人暮らしで年収が600万円以上ある人もある程度いるが，200万円未満の人も多く，独身男性での間の経済格差は相当多いことが窺える．

7．50代独身者の親密関係

次に50代独身者の親密関係を見てみよう（表-8）．

表-8 恋人や友人の有無　一人以上いる人の割合

（%）

		恋　人	同性の友人	異性の友人	連絡をとる親戚
男性	未婚	12.4	58.9	36.4	47.6
	離死別	24.6	67.9	50.3	56.6
女性	未婚	14.6	78.1	44.2	59.2
	離死別	21.4	82.8	46.6	66.8

まず，恋人を見ると全体として，16.7％に恋人がいると答えている．つまり，6 人に 5 人は恋人がいないということになる．男女差は有意でないが，男女とも離死別者の割合の方が，未婚者よりも有意に多い．

次に，友人数，連絡をとっている親戚の数を見てみよう．同性の友人に関しては，70.4％の人に一人以上いる．ただ，女性＞男性であり，特に男性未婚者では，同性の友人もいない人が約 4 割となっている．異性の友人がいる人は，42.5％だが，恋人と同じく離別者に多くなっており，男性にその差は顕著である．連絡をとっている親戚がいる人は，全体では 56.0％だが，これも男女差が大きく，男性未婚者では 5 割を切っている．

そして，恋人がいない人に，交際相手が欲しいかどうかを聞いている（表−9）．全体では，欲しい（とても欲しい，欲しい，どちらかというと欲しいの計）が 52.9％，欲しくない（どちらかというと欲しくない，欲しくない）が 47.1％と拮抗しているが，男女差，未婚，離死別者の差が大きく，男性＞女性　離死別者＞未婚者という関係になっている．特に男性離別者の 4 人に 3 人が恋人が欲しいと回答しているのに，女性未婚者は，7 割の人が恋人は欲しくないと答えている．

ただ，実際に交際相手を探す活動をしている（恋活，婚活）をしている人は少なく，全体でわずか 6.8％．最も多い男性離死別者でも 14.2％となっている．これはコロナ禍が影響している可能性がある．ただ，20−39 歳の調査でも，交際相手を探す活動をしている人は，10％程度とされているので，日本社会全体の特徴かも知れない．

つまり男女交際は，離死別者の方が未婚者よりも活発である．

続いて，「普段のできごとをよく話す相手」を見てみよう（表−10）．
全体で見ると，①両親 31.6％，②兄弟姉妹 17.5％，③その他家族親戚 12.3％，④恋人 10.8％，⑤同性の友人 33.9％，⑥異性の友人 10.6％，⑦美容室やサロンのスタッフ 1.7％，⑧スナックのママやマスター，ホステス 0.9％，⑨キャバクラやクラブのキャスト 0.6％，⑩その他 6.6％ ⑪よく話す相手はいない 27.1％となっている．

このように，よく話す相手がいない人は，独身者の 4 分の 1 を超えている．そして，家族類

表−9　恋人が欲しいかどうか（恋人がいない人対象）

		とても欲しい	欲しい	どちらかといえば欲しい	どちらかといえば欲しくない	欲しくない	N
男性	未婚	16.4％	8.7％	32.3％	22.6％	20.0％	390
	離死別	22.5％	19.2％	32.5％	10.8％	15.0％	120
女性	未婚	5.0％	5.9％	17.6％	26.1％	45.5％	222
	離死別	4.4％	8.3％	19.4％	25.2％	42.7％	206

表-10　家族類型別，普段のできごとをよく話す相手

（%）

		いない	両　親	兄　弟 姉　妹	その他 家族親族	恋　人	同性の 友人	異性の 友人
男性	未婚独居	54.1	11.5	10.6	2.3	5.0	27.6	8.8
	親同居	20.7	64.8	17.8	4.2	10.3	29.6	8.0
	離死別独居	36.4	13.1	14.1	4.0	20.2	31.3	15.1
	親同居	30.8	41.0	12.8	7.7	12.8	30.0	10.3
女性	未婚独居	27.1	20.3	22.0	11.0	7.0	41.7	7.7
	親同居	10.4	64.3	21.7	7.8	11.1	48.0	7.4
	離死別独居	21.2	14.4	17.3	19.2	16.3	40.4	8.7
	親同居	8.9	48.9	22.2	33.3	11.1	33.3	11.1
	他同居	8.0	18.6	21.2	46.9	10.0	29.2	11.5

注1：MA，前掲の⑥-⑩を除く．
注2：ケース数が少ない「男性のその他同居」，「未婚その他同居」の数字は割愛した．

型別に見ると，性別，独身理由，同居家族がいるかどうかで顕著な差があり，男性＞女性，離死別＞未婚，親同居＞独居である．男性未婚独居者は，半数以上がよく話す相手がいないと答えている．一方，離死別親同居女性，その他同居女性は，1割を切っている．

親同居者と独居者，その他同居者には，「両親」を除いて，相手のカテゴリーに差はあまりない．そして，「兄弟姉妹」が女性では，約2割と高い数字になっている．男性でも親同居未婚者は「兄弟姉妹」が重要な話し相手になっていることが分かる．

次に，様々なケースを仮定して，「頼れる人の有無，それは誰なのか」を聞いている（表-11）．次の4つのケースについて回答を求めた．「悩み事で相談したくなった」「急にまとまったお金が必要になった」「病気になり，看護，家事が必要になった」「入院したときに手続きする人が必要になった」

「頼れる人が誰もいない」と回答した人は，「悩み事」で34.3%，「まとまったお金」で48.8%，「看護家事」で38.7%，「手続き」で32.0%となっている．一番多かった「まとまったお金が必要になった時，誰に頼れるか」を家族類型別に見てみよう．

マルチアンサーだが，全体では，頼れる人はいないが48.8%，父9.8%，母21.1%，子ども4.2%，兄弟姉妹13.5%，親戚3.3%，恋人2.5%，友人5.0%，職場の仲間1.0%，近所の人0.1%，その他6.5%となっている．複数回答と言いながら，複数付けている人は，約15%に留まっている．

ほぼ半数の人が頼れる人がいないと回答するが，それは，男性は54%，女性は42%と有意に男性の方が多い．女性では未婚一人暮らし，離死別一人暮らしが共に50%程度となっている．親同居女性，そして，その他同居の離死別女性はいずれも3分の1程度となっている．

頼れる人は，母，兄弟姉妹，父の順に多い．ただ，父親の存命率が4割，母親の存命率7割なので，親が存命であれば約4分の1が親に頼れることを意味している．また，兄弟姉妹は，

表-11　家族形態別「急にまとまったお金が必要な時，頼れる人」（M.A.）

（%）

		頼れる人はいない	父	母	子	兄弟姉妹	親戚	恋人	友人	職場仲間	その他
男性	未婚独居	59.2	6.0	11.9	-	14.7	2.8	0.9	7.8	1.5	7.4
	親同居	51.2	15.5	28.6	-	8.9	5.2	1.4	2.8	0.9	6.6
	離死別独居	51.5	11.1	14.1	3.1	13.1	-	9.1	7.1	2.0	5.1
	親同居	59.0	7.7	28.2	-	5.1	-	-	5.1	5.1	5.1
女性	未婚独居	51.7	6.8	17.8	-	16.9	6.8	0.8	5.1	-	7.6
	親同居	36.5	14.8	40.9	-	13.9	5.2	0.9	2.6	0.9	3.5
	離死別独居	49.0	1.9	14.4	13.5	12.5	-	3.8	6.7	1.0	4.8
	親同居	33.3	13.3	33.3	11.1	17.8	6.7	2.2	4.4	2.2	6.7
	他同居	35.4	9.7	16.8	22.1	15.9	1.8	2.7	0.9	-	9.7

注１：近所の人は，その他に加えた．
注２：ケース数が少ない「男性のその他同居」，「未婚その他同居」の数字は割愛した．

離死別親同居，未婚親同居男性を除いて，12-18％となり，全体でも７人に１人の50代独身者は，主に話す相手でもある兄弟姉妹を頼りにしていることが分かる．

また，子どもがいる離死別女性にとっては，子どもは重要な頼る相手になるが，男性にとっては，子どもがいてもあてにしていない状況が窺える．

８．将 来 不 安

最後に，老後の将来不安に対する回答をまとめてみよう（表-12）．経済的不安，介護不安，孤立不安，孤独死不安を４段階で聞いている．

４つの不安の中では，介護不安が一番高く，ほぼ８割の人が不安を感じている．孤立不安は少ないが，それでも７割弱の人が不安を感じている．孤独死不安もほぼ４人に３人の50代独身者が感じていることになる（大いにある＋あるを「ある」とし，あまりない＋ないを「ない」とする）．

詳しく見ていこう．このような高齢期の不安を解消するものは，家族の存在と，お金であろう．家族に関しては，たとえ，現在親と同居していても，ほとんどの場合親が先になくなるので，配偶者（恋人）や子どもの存在が重要になる．

表-12　「将来，高齢になって下記のような不安がありますか」の回答

（%）

	大いにある	ある	あまりない	ない
経済的に十分な生活ができなくなる	45.6	31.5	14.3	9.6
十分な介護が受けられなくなる	42.2	36.9	12.9	8.1
孤立して寂しい思いをする	34.2	34.3	20.4	11.1
孤独死してしまう	41.7	33.0	15.7	9.5

表-13 子どもの有無別 将来不安（大いにある＋あるの割合）

		経済不安	介護不安	孤立不安	孤独死不安	N
男性	未婚子ども無	76.9%	78.1%	69.6%	78.7%	438
	離死別子ども無	67.5%	72.3%	69.9%	82.3%	83
	子ども有	84.2%	84.2%	78.9%	77.4%	76
女性	未婚子ども無	78.9%	83.5%	71.2%	81.3%	251
	離死別子ども無	72.3%	73.9%	60.0%	67.7%	65
	子ども有	78.1%	79.1%	59.9%	58.9%	197

やはり，子どもの有無が効いてくると考えられる．未婚で子どもがある人は少数（男性７ケース，女性８ケース）なので，離死別を子どもの有無別に分けて集計した結果が表-13である．

経済不安で見ると，離死別者で大きく数字が分かれた．特に男性で，子どもがいる方が経済不安が高いのは，今では子どもの経済的負担の方が大きいことの影響かも知れない．介護不安に関しても同様の傾向が見られた．孤立不安に関しては，離死別女性は子どもの有無にかかわらず不安は低く，子どもがいても離死別男性の不安が高かった．孤独死に関しても男性は子どもなしでも孤独死不安は有意な差がなく，離婚後の子どもとのコミュニケーションがあまりないことを反映している．女性は，子どもがある方が，孤立不安や特に孤独死不安を大きく低下させることがみてとれた．

次に，恋人の有無で将来不安意識の差について見てみよう（表-14）．

経済不安に関しては，恋人のある人の方が，特に男性の方で大きく不安が減少するが，これは，収入が高い男性ほど，恋人がいることが影響していると思われる．男性では，孤独死不安は低下するが，孤立不安や介護不安は有意な差が見られなかった．それに対し，女性は，いずれの不安も恋人なし層の方が不安が高い．つまり，恋人の存在は，将来不安を低下させる重要な要因であることが分かる．

また，ある程度お金があれば，ケアしたり看取ってくれる家族がいなくても，有料老人ホームなどに入ることを想定して，将来不安を解消する事ができる．インタビュー調査でも，経済力がある未婚独居男性（地方在住正社員）は，介護付き有料老人ホームに入ることを考えていると言っており，経済基盤が弱いある離別独居女性（地方在住パート）は，そのような状態に

表-14 恋人有無別 将来不安（大いにある＋あるの割合）

		経済不安	介護不安	孤立不安	孤独死不安	N
男性	恋人無	87.4%	77.9%	70.9%	79.6%	510
	有	71.8%	78.8%	72.4%	70.3%	94
女性	恋人無	78.5%	82.9%	67.7%	73.2%	428
	有	73.4%	68.1%	54.5%	59.4%	94

なることは考えたくないと答えていた．

実際，個人年収と将来不安には逆相関がある（表−15）．ただ，男性でも女性でも年収が600万円を超えないと，顕著に低下の効果が現れるわけではない．特に女性では，年収600万円以上稼ぐ独身者は5％程度である．また，貯金においても，貯蓄額1000万円を超えないと不安を解消する大きな効果は見られない（表−16）．

将来不安の結果をまとめると，男女とも収入が高いほど，そして，貯蓄額が多いほど将来不安を低下させる効果があった．逆に言えば，低収入や貯金額が少ない者は将来不安が相当高いと言うことである．そして，特に女性で収入が高い者は少数しかいないことは将来問題となろう．

子どもと恋人の存在は，女性にとっては将来不安を低下させるが，男性にとっては，あまり差はないことが分かった．

表−15　個人年収別　将来不安（大いにある＋あるの割合）

		経済不安	介護不安	孤立不安	孤独死不安	N
男性	200万円未満	85.5%	85.6%	81.6%	83.7%	166
	200−400万円	80.0%	79.3%	72.8%	79.3%	140
	400−600万円	76.4%	75.1%	75.5%	79.5%	106
	600万円以上	63.9%	72.8%	72.8%	67.1%	114
女性	200万円未満	81.2%	83.0%	69.3%	70.1%	218
	200−400万円	82.9%	83.6%	66.4%	73.1%	152
	400−600万円	57.8%	68.9%	57.8%	64.4%	45
	600万円以上	52.0%	68.0%	54.0%	64.0%	25

注：DK, NA を除いて集計．

表−16　貯蓄額別　将来不安

		経済不安	介護不安	孤立不安	孤独死不安	N
男性	100万円未満	89.4%	88.8%	78.8%	86.1%	179
	100−300万円未満	84.1%	79.7%	75.1%	82.9%	69
	300−1000万円未満	80.5%	76.9%	76.8%	76.8%	82
	1000万円以上	62.3%	62.9%	67.9%	78.6%	140
女性	100万円未満	87.1%	84.9%	70.2%	72.0%	132
	100−300万円未満	96.1%	94.1%	70.6%	78.4%	51
	300−1000万円未満	88.9%	87.5%	63.9%	77.8%	72
	1000万円以上	53.8%	71.4%	63.1%	64.3%	84

注：DK, NA を除いて集計．

9．ま　と　め

未婚率や離婚率の高まりによって，中年独身者は増えつつある．

その中で50代独身者の生活実態と将来意識を知るために，インターネット調査を行い，1126サンプル得た．その回答を独身理由（未婚，離別，死別）別，性別，家族類型（独居，親同居，その他同居）別に分析を行った．

独身者は，孤立しやすく，また，将来，経済的困難に直面するリスクが高い．

特に未婚一人暮らし男性は，半数以上が日常的に話す相手がおらず，孤立する傾向が強い．また，女性は収入が少なく，現在，同居親に経済的に依存する者も多数存在している．将来生活への不安を感じる者の割合は高い．特に，4人に3人が，将来の孤独死の不安を感じている．収入，貯金や子どもや恋人の存在が，これらの不安を低減させる効果はあるが，部分的である．

増大する中年独身者の将来の貧困や孤立を防ぐため，早期の政策的対応が求められている．

参考資料

藤森克彦，2022,「中年未婚者の生活実態と老後への備えに関する分析」『年金研究』no.15.
石田光規，2011,『孤立の社会学』勁草書房.
能勢桂介・小倉敏彦，2020,『未婚中年ひとりぼっち社会』イースト・プレス.
山田昌弘，1999,『パラサイトシングルの時代』筑摩書房.
———，2006,『離婚急増社会における夫婦の愛情関係の実証研究』科学研究費補助金研究成果報告書.
———，2017,『家族難民』朝日新聞出版.
上野千鶴子，2007,『おひとりさまの老後』法研.